

「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」中間評価結果表

研究領域等	地域のアイデンティティーの解明—相互理解を深めるために—
研究課題名	東南アジアのイスラーム：トランスナショナルな連関と地域固有性の動態
責任機関	東京外国語大学
研究代表者	床呂 郁哉（アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授）
研究期間	平成18年度～平成22年度
主に研究対象とする国名	（インドネシア）（マレーシア）（フィリピン）（タイ）

<p>1. 総合評価</p> <p><input type="checkbox"/> A. 研究を継続する。</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> B. 研究計画を一部見直しの上、研究を継続する。</p> <p><input type="checkbox"/> C. 研究計画の大幅な見直しをした上で、研究を継続する。</p> <p><input type="checkbox"/> D. 研究を終了する。</p> <p>[コメント]</p> <p>本研究課題は、東南アジアのイスラームのトランスナショナルな連関と地域固有性の動態について明らかにすることを目指すものである。目的に沿った研究が進んでおり評価できるが、事業内容、成果の還元について、従来のプロジェクト型の研究との違いをより明確にするよう留意する必要がある。</p> <p>また、国別調査ではないことから、地域間連携研究チームを活用して、4カ国の連携をまとめる体制の整備が期待される。ただ、これは当初計画に沿った助言であるが、計画の見直しに当たっては、むしろislams in SEAに重点を置いた方が良いという意見や、たとえばインドネシア、フィリピンといった重点地域に集中した方が良いという意見もあったことを付言しておく。</p> <p>社会的ニーズに対応して、公開講座、翻訳事業などを活発に行い、研究者同士のミーティング、ワークショップ、ヒアリング調査を意欲的に実施していることは評価できるが、現地の日本人に役立つだけでなく、日本にいる日本人への発信、赴任者だけでなく、赴任前の人たちにも発信する工夫が望まれ、ホームページに取り上げるテーマ、コンテンツ、取り上げ方などさらなる工夫が必要である。</p> <p>最終的な成果により具体的なイメージを持って、継続研究課題（東南アジアにおけるイスラームと政治、東南アジアにおけるイスラームと経済、東南アジアの域内連関）をどのように集約するのかについて検討する必要がある。中東との連関に関しては、地域連関という形では十分研究が進んでいないように見受けられることから、検討していただきたい。</p>

2. 項目ごとの評価

(1) 本事業の目的及び研究領域等の趣旨に合致した研究が実施されているか。

- A. 十分実施されている B. 概ね実施されている
 C. あまり実施されていない D. 実施されていない

〔コメント〕

目的として設定している「東南アジアにおけるイスラームの正確で詳細な理解が必要かつ不可欠」であるということに関しては、十分研究が実施されていると評価できる。他方、ニーズ対応型研究であるということリーダーは自覚しているように見受けられるが、実際の研究実施に当たっては、従来の研究プロジェクトとの差がなくなりつつあることが懸念されることから、留意することが望まれる。

研究領域の「地域のアイデンティティーの解明—相互理解を深めるために—」については、地域全体のアイデンティティーではなく、重点としている4カ国における特異性を抽出しているという点、「東南アジア」という広い枠にとらわれることなく、個別性を重視したアイデンティティーを追及している点は十分評価できる。他方、地域間連携研究チームの役割がいまいになっているように見受けられる。

「相互理解」については、日本側のニーズ、対象国側のニーズを十分考慮して、今後掘り下げていくことを期待する。

(2) 設定されている社会的・政策的ニーズに応える形で研究が実施されているか（実績の評価）。

- A. 十分実施されている B. 概ね実施されている
 C. あまり実施されていない D. 実施されていない

〔コメント〕

社会的ニーズに対応して、公開講座、翻訳事業などを活発に行い、研究者同士のミーティング、ワークショップ、ヒアリング調査を意欲的に実施していることは評価できる。

他方、設定されている「東南アジアにおけるイスラームの正確で詳細な理解が必要かつ不可欠なニーズ」は、これだけをもって東南アジア固有のニーズであるとは言えず、社会的・政策的ニーズについては、研究進捗の上で、一般的な研究プロジェクトと変わらない成果の社会還元であるとの印象を与えることのないよう、あらためて深化させる必要がある。

また、成果発信については、一般向けも含めて一定の実績を上げていると評価できるが、日本社会への発信も含めて、より積極的・効果的な発信の工夫が期待される。

- (3) 社会的・政策的ニーズに応える研究成果の創出が期待できるか（将来性の評価）。
- A. 十分期待できる B. 概ね期待できる
 C. あまり期待できない D. 期待できない

〔コメント〕

これまでの成果をニーズの観点から改めて見直し、今後どれだけ理論面での集約を図っていくのかに、本研究成果の創出はかかっており、個人的な研究対象の検証にとどまることなく、社会的・政策的ニーズの大きさや質または水準を常に確認・再検討しながら、リーダーシップを発揮して、統合的な共同研究へと深化させることが必要であり、研究参加者の個々の業績から見て十分可能であると判断できる。

- (4) 学術的に高い水準が確保されているか。
- A. 十分確保されている B. 概ね確保されている
 C. あまり確保されていない D. 確保されていない

〔コメント〕

本研究課題に沿った、これまでの業績がある研究者が、真摯に各々の研究を続けているという点で、一定の水準が確保されており、評価できる。

ただ、本事業から生まれてきた学術的業績は優れて高い（オリジナリティがある）とまでは言いがたい。研究分担者、テーマが多彩であるにもかかわらず、オリジナルな成果というよりは、一般向けの入門的な水準が多い。